

越智博美

反「女性差別カルチャー」読本制作委員会編  
『反「女性差別カルチャー」読本』

(タバブックス、2022年)

自著紹介という題目に、ここでご紹介するものが果たして趣旨に沿うものか、実はかなり悩んだ。というのもこれは、たしかにわたしも「著」したかもしれないが、それはとてもとても短い文章であり、またそれを言うなら他の文章もとてもとても短いものばかりだからだ。そしてまた、これはいわゆる

zine (ジン)と呼ばれる範疇に属するごく薄い、たいへんにささやかな「冊子」であるからだ。

それにもかかわらず、あえてこのzineを紹介しようと思うのは、やはりこの冊子に文章を寄せようと思った気持がのびきならない「危機感」の共有にあったからである。この冊子の裏表紙には、「女性差別的発言、誹謗中傷、攻撃、からかいなど、SNSやメディア、リアルな生活において女性差別を「ネタ」として扱う、いうなれば「女性差別カルチャー」はなぜなくならないのか。この問題について背景にある仕組みをより深く考え、さまざまな形で継続して議論、発信していくために、この冊子を制作しました」とあるが、同じ思いを持っているからだ。

とりわけSNSは便利であると同時に人を傷つける言葉が渦巻く場であることは周知の通りである。#MeTooが、みずからの性暴力の体験を語るに語れない被害者たちに、「わたしも」と言うだけで力になるハッシュタグであった一方で、そのひとつとも言える#KuTooを掲げた女性はネット空間で激しく中傷された。こうしたオンラインハラスメントについて本書に寄稿した隠岐さやか氏、および濱田真里氏は、それぞれの文章で、そうした中傷を書き込む人がSNSを「匿名のロッカールーム」だと思い込んでいないかと指摘する。男同士の絆を確かめ合うためであり、その一環として女性嫌悪の逸話の交換が行なわれる場所としてロッカールームは象徴的な場所だが、問題なのはSNSという公にさらされた空間ですらそのような場として扱われるということだ。わたしもまた吉野家の重役による大学の講義の場における不適切発言について書いたが、この重役が例の発言をするそ

反「女性差別カルチャー」

読本

小川なまか  
隠岐さやか  
小山内園子  
越智博美  
北村紗衣  
河野真太郎  
小林えみ  
清水高子  
関口竜平  
濱田真里  
能川元一  
松尾亜紀子  
松永典子  
宮川真紀  
山口智美  
山田亜紀子

の前置きに「不愉快な思いをされた方がいたら申し訳ないのですが」と述べていたことを、言葉のうえていわばそうしたロッカールームを作る言語行為ではないかと指摘した。不愉快な思いをすることを予測できるということは、これまでの人生のなかでもおそらくそうした不適切発言やセクハラを見たり聞いたりしたことがあったということでもある。そのうえであえてそうした発言を教室の人々と「共有」するよ、という合意を取ろうとするこの言語行為こそがロッカールーム的なのである。

こうした言動が繰り返し出てくることには、おそらくいくつもの原因があるはずだし、そのヒントとなるような本も最近は出てきているので今後も考えていきたいが、若い学生と向い合う仕事をしている者として、このような「カルチャー」を継承してほしくないし、その加害者にも被害者にもなってほしくないという思いが強い。その願いとともに、このような「カルチャー」がはらむ問題を多様な声で語るこの冊子、一読をお勧めしたい。